

プロジェクト型言語学習は どう変わっていけるか

山崎直樹（関西大学） ymzknk@kansai-u.ac.jp

2025.3.20, 関西学院大学梅田キャンパス

第1部

プロジェクト型言語学習の曲がり角

言語表現とコンテンツは誰が作るか

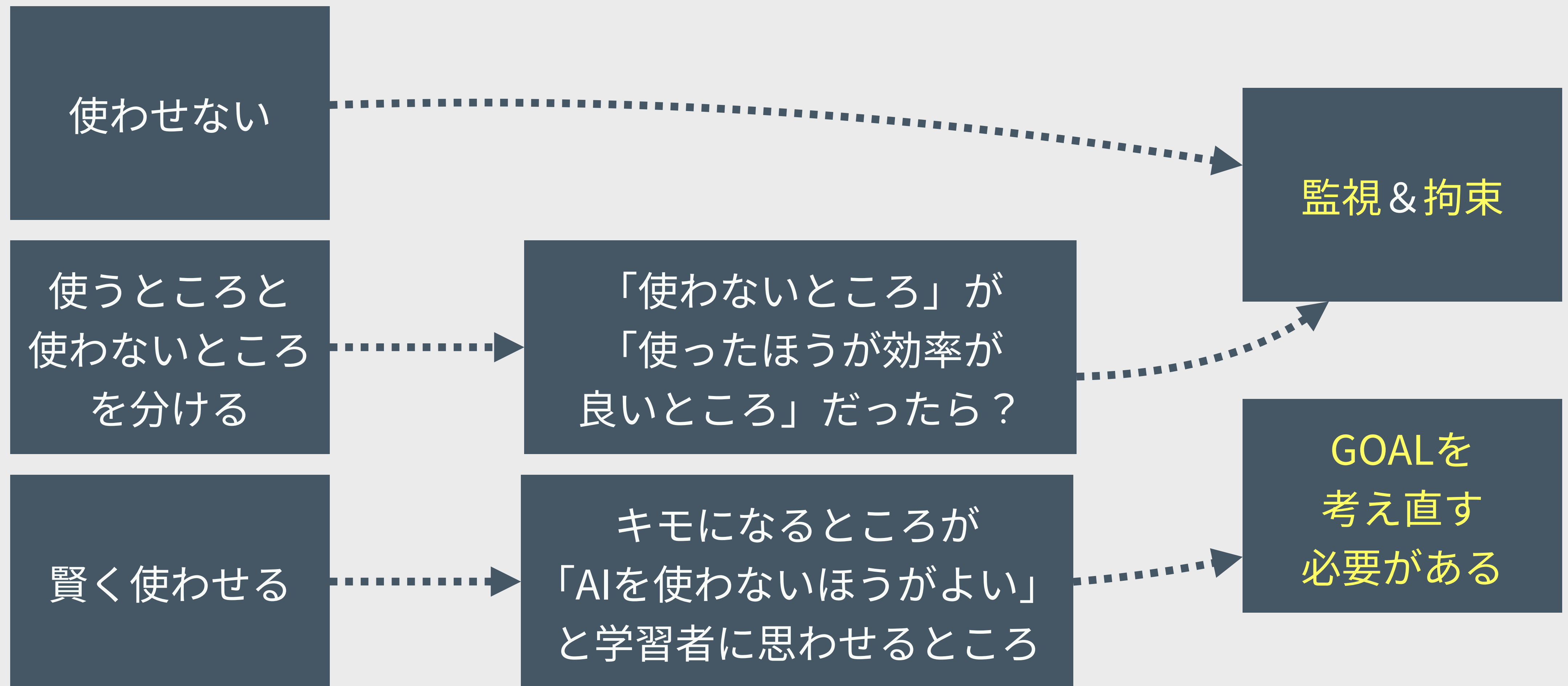
- 言語学習で主に扱うもの：言語表現とコンテンツ
- 機械翻訳の進化、生成系AIの登場が何をもたらしたか？
- 言語表現もコンテンツも、もはや、人手を必要としない？

こんな課題があったとします……

あなたに縁が深い地域を選び、そこでお正月に食べる伝統的な食品／料理を調べ、〇〇語で紹介をしてください。

	むかし	10年前	いま
言語表現	人手	深層学習による 機械翻訳	LLMに基く 生成系AI
コンテンツ	人手	人手	LLMに基く 生成系AI

AIの使用を制限する？



言語教育のゴール

- 既存の学習ゴールの改善を企図しているだけでは「言語もコンテンツも、もはや人がやらなくてもよい」という状況は変わらない。それがいやなら、「**監視と拘束に立脚する言語教育**」になるしかない。
- テストやパフォーマンスで測れるような言語的スキル、ルーブリックで評価できるような眼に見える形での成果物……をゴールにした言語教育は再考を迫られているのかもしれない。

コロナ禍のオンライン授業で学んだこと

- 我々がよく使う評価の方法は「監視と拘束」を基盤に成り立っている。
- オンライン授業における「テスト」で、「不正行為防止」に心血を注いだ人がどれほどいたことか……

👉 山崎直樹（2023）「監視の要らない中国語教育を目指して」『中国21』 58, 155-176. https://aichiu.repo.nii.ac.jp/record/2000950/files/58_155-176_山崎.pdf

第2部

Translanguaging Classroom

García, O., Johnson, S.I., & Seltzer, K. (2016). *The Translanguaging Classroom: Leveraging Student Bilingualism for Learning*.

『トランスランゲージング・クラスルーム』（明石書店）

Translanguaging Classroom

- 多言語使用を前提とした教育：教室において、**生徒が持つ全ての言語資源**（母語、学習言語など）を柔軟に活用し、学習を促進する教育手法。
- 言語の分離から統合へ：従来の言語教育のように、言語を分離して扱うのではなく、生徒の**多言語能力を統合的に活用**することを重視。
- 学習とアイデンティティの尊重：生徒の**言語的背景を尊重**し、学習内容への深い理解と、自己表現の促進を目指す。

Languageing とは？

- 言語を使って思考を形成したり、理解を深めたりするプロセス
- 単に言葉を操るだけでなく、自分が理解している内容や、聞いたり読んだりして得た情報を言葉で表現する過程そのものが重要視される。
- この過程を通して、知識が形成・再構築されていくと考える。

あるTLCでは、次の生徒を1つのグループにした

MHB読書会 (2025.3.15) の山田浩美氏の資料の一部

	ルーツ	渡米時期	西語auracy	西語literacy	英語auracy	英語literacy
エディ	ドミニカ共和国	米国生まれ	流暢	学年レベル以下	流暢	学年レベル以下
ルイス	エルサルバドル	10年生	流暢	低い	ELL	低い
マリアナ	メキシコ	米国生まれ	流暢	低い	流暢	学年レベル以下
ノエミ	エクアドル	8年生	流暢	高い	ELL熟達期	ELL
テレシータ	グアテマラ	幼少期	流暢	高い	流暢	高い

公共広告を使い、批判的思考を促す授業

MHB読書会 (2025.3.15) の山田浩美氏の資料の一部

探求	- 英語とスペイン語の字幕をつけたビデオクリップ - コンテンツに関連した写真 - 多言語リスニングセンターの設置（調査トピックに関するテキスト、ポッドキャスト、インタビュー、音楽等） - グラフィックオーガナイザー（KWL,ワード・ウォール等）
評価	- 多言語のリーディングテキスト、関連するウェブサイト、ポッドキャスト等、生徒の言語のマルチメディアの提供 - 生徒の批判的思考を育むための一連の質問項目の作成
想像	- メンターテキスト、ポスターの見本（生徒が目指すべきものの例の紹介）
発表	- 作成したものに対するフィードバック - 英語と家庭言語でのプレゼンテーションのアウトライン、フォーマット、センテンススターターのセットの提供
実行	- 生徒作品の学内掲示、生徒作品の製本（学校図書館で閲覧するため） - 他の教員や管理職との繋がり（生徒のプレゼンへの招待） - 地域社会との繋がり の構築（地域住民や家族に向けたバイリンガルイベントの企画） - ラジオ局やウェブサイト等に生徒作品を提出するための支援

TLCで重要なこと

- スタンス: 教師が持つ信念・価値観
- デザイン: 実際の教育活動・授業計画の組み立て方
- シフト: 教室の実践の中で臨機応変に調整・変更すること

GLP, LSP

General Linguistic Performance:

いわゆる「言語」ごとに能力を区切るのではなく、学習者が持つ「総合的な」言語資源・言語レパートリー全体の運用を指す。

Language Specific Performance:

社会的に「これは英語」「これはスペイン語」のように、名前のついた個別言語として区別される体系をあえて基準にして、その「特定言語の特徴を使いこなす」パフォーマンスを指す。

GLPとLSPを用いた評価の例

◆ 英語のLSP

● スペイン語のLSP

★ 自身の言語レパートリーをフルに使ったGLP

auracy
(聞く力、話す力)



literacy
(読む力、書く力)



準備期

熟達期

外国語学習環境下でGLPという考えかたを 活かしたいと思っても……

- 教室のほぼ全員が共通の言語（日本語）を使える
- L2, L3に比べ、圧倒的なL1の能力
- 入門レベルのクラスだと、使えるL2, L3のリソースが少ない。共有しているリソースはさらに少ない
- プロジェクト型の学習で、L2, L3を使う必要があるのは、教室外向けのアウトプットをするときだけ（そして、それはAIが代わりをしてくれる）
- 複数の言語レパートリを使う必然性がある仕掛けが必要

問いかけ

- CEFRなどでも「部分的能力であれ、複言語能力は尊い」と称賛しているが、我々はふだんそれを総合的に評価しているか？
- 複数の言語レパートリを総合的に伸ばす学習の設計をしているか？
- 個別の言語のスキルの獲得そのものを目的とする授業はほんとうに必要か？